# 大学における新しい英語教育の研究

## A Study on New English Education at Japanese Universities

本稿は、「静岡文化芸術大学平成13年度文化政策学部長特別研究費」によって本学英語教員が行った調査および研究の一部を論文にまとめたものである。ウィレット教授はアメリカ合衆国の大学における外国語教育について調査したことを英文の論文にまとめ（前稿）、わたしたち日本人教員は日本国内の大学と本学を研究担当範囲とした。わたしたちの新設大学にあって、これからの英語教育をどのように展開していくべきか、特に現状において改善すべき点や他大学ではどうしているのかと疑問に思う点をあげ、それをアンケートにして調査した結果が第Ⅰ章である。第Ⅱ章は、実際に訪問した慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの事例について記述した。第Ⅲ章は、平成13年度に本学で夏と冬に２回実施したTOEICのIP受験のスコアの伸

美濃部京子
文化政策学部国際文化学科
Kyoko MINOBE
Faculty of Cultural Policy and Management
Department of International Culture

鈴木　元子
文化政策学部国際文化学科
Motoko SUZUKI
Faculty of Cultural Policy and Management
Department of International Culture

下楠　昌哉
文化政策学部国際文化学科
Masaya SHIMOKUSU
Faculty of Cultural Policy and Management
Department of International Culture

本稿は、日本の大学における英語教育の実態を探るために実施したアンケート調査、他大学訪問、および本学でTOEICを団体受験した学生のスコアの伸びと、ニュージーランドでの夏期英語研修参加、マルチメディアLL教室開放日の利用、TOEIC講座の受講との相関関係等について研究した成果をまとめたものである。

### 第Ⅰ章　大学の英語教育に関するアンケート

国際文化や国際関係、人文教育等の学科・学部を有する大学を中心に、全国119の大学にアンケートを送付した。そのうち、回答を寄せられた25大学（国立大学13校、公立大学２校、私立大学10校）について、以下、見ていくことにする。

#### 1．回答校：英語教員が英語科目を担当している学科・学部の規模（入学定員から）

| 学生数 | 0～100名 | 101～250名 | 251～500名 | 501名以上 |
|---|---|---|---|---|
| 国立大学 | 2校 | 3校 | 3校 | 5校 |
| 公立大学 | 1校 | － | 1校 | － |
| 私立大学 | 1校 | 1校 | 7校 | 3校 |
| 計 | 4校 | 4校 | 11校 | 8校 |

#### 2．英語担当の専任教員数

| 英語の専任教員数 | 1～5名 | 6～10名 | 11～20名 | 21名以上 |
|---|---|---|---|---|
| 国立大学 | 2校 | 4校 | 3校 | 4校 |
| 公立大学 | － | 2校 | － | － |
| 私立大学 | 4校 | 6校 | － | － |
| 計 | 6校 | 12校 | 3校 | 4校 |

英語の専任教員一人当たりの学生数は、（単純計算で）次のようになる。

| 学生数 | 10～30名 | 31～50名 | 51～100名 | 100名以上 |
|---|---|---|---|---|
| 国立大学 | 3校 | 4校 | 6校 | － |
| 公立大学 | 1校 | 1校 | － | － |
| 私立大学 | － | 3校 | 6校 | 1校 |
| 計 | 4校 | 8校 | 12校 | 1校 |

総じて、私立大学の方が教員一人当たりの学生数は多い。

本学の場合は、平成14年度現在、全学で１学年定員300名の学生を４名の英語専任教員で担当している。単純計算で、専任教員一人当たりの学生数は75名で、決して恵まれているとはいえない（現在の欠員２名が補充され、英語の専任教員が６名になれば、一人当たりの学生数は50名になる）。

#### 3．ネイティブスピーカーの英語専任教員数

最近は、講読一辺倒の英語教育から脱し、オーラル・コミュニケーションに重点を置く大学が増えている。ネイティブスピーカーを専任として何人雇用しているかによって、その大学のオーラル・コミュニケーションに対する力の入れ具合を推し量ることができる。

（国立大学の場合は、「外国人教師」というポストにあるネイティブ教員を含む）

びと、各種要因（ニュージーランドでの夏期英語研修参加、マルチメディアLL教室開放日の利用、TOEIC講座の受講）との相関関係について研究した結果をまとめたものである。

| ネイティブ数 | 0名 | 1名 | 2名 | 3名 | 4名 | 5名 | 6名以上 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国立大学 | 1校 | 6校 | 2校 | − | 1校 | 2校 | 1校（10名） |
| 公立大学 | − | 1校 | − | 1校 | − | − | − |
| 私立大学 | 2校 | 4校 | 1校 | 1校 | 1校 | 1校 | − |
| 計 | 3校 | 11校 | 3校 | 2校 | 2校 | 3校 | 1校 |

ネイティブ専任の占める、英語専任教員全体に対する割合はこのようになる。

| ネイティブの割合 | 0～10% | 11～20% | 21～30% | 31～50% | 51%以上 |
|---|---|---|---|---|---|
| 国立大学 | 3校 | 6校 | 4校 | − | − |
| 公立大学 | − | 1校 | − | 1校 | − |
| 私立大学 | 2校 | 3校 | 1校 | 2校 | 2校 |
| 計 | 5校 | 10校 | 5校 | 3校 | 2校 |

これで見ると、専任教員の2割から3割がネイティブスピーカーという大学が多いが、私立大学の中には半数以上がネイティブという大学もある。オーラル・コミュニケーションに力を入れていることを大学の看板とし、入学者を引き付けると同時に、英語の話せる学生を社会に送り出していこうとする大学側の姿勢と受けとめることができる。

本学では現在は専任教員4名中ネイティブスピーカー1名で、割合にすると25%であるが、平成15年度からは5名中2名になる予定なので、割合は40%にアップし、（平成16年度にさらにもう一人ネイティブが雇用されれば50%になり）、ネイティブスピーカーによる生きた英語の指導に力を入れているという姿勢を打ち出すことになる。

### 4．非常勤講師数

各大学ともかなりのコマ数を非常勤講師に頼っているのが、日本の大学の現状である。

| 非常勤講師数 | 0～5名 | 6～10名 | 11～20名 | 21名以上 |
|---|---|---|---|---|
| 国立大学 | 2校 | 3校 | 3校 | 5校 |
| 公立大学 | − | 1校 | 1校 | − |
| 私立大学 | 1校 | 3校 | 5校 | 1校 |
| 計 | 3校 | 7校 | 9校 | 6校 |

概して、全学の英語を受け持つ総合大学の非常勤数が多くなっているが、勿論、各大学により事情が異なるので、非常勤講師数だけから何らかの評価を下すことはできない。本学の場合は、現在欠員があるため8名の非常勤講師をお願いしているが、欠員が補充されて平常に戻れば、非常勤は5名以下になる予定である。

### 5．ネイティブスピーカーの非常勤講師数

ネイティブスピーカーを専任で雇用できない場合、どうしても非常勤講師の雇用となる。

| ネイティブの非常勤講師数 | 0～5名 | 6～10名 | 11～20名 | 21名以上 |
|---|---|---|---|---|
| 国立大学 | 8校 | 2校 | 2校 | 1校 |
| 公立大学 | 1校 | 1校 | − | − |
| 私立大学 | 5校 | 4校 | 1校 | − |
| 計 | 14校 | 7校 | 3校 | 1校 |

非常勤講師全体に占めるネイティブ非常勤講師の割合は次の通りである。

This paper is based on research carried out by the SUAC English faculty pursuant to the "Special Research Grant from the Dean of the Faculty of Cultural Policy and Management at SUAC in 2001." Prof. Steven Willett wrote one research article in English on foreign language programs at American universities, and three Japanese teachers of English covered Japanese universities and SUAC.

The first chapter shows the result of a questionnaire consisting of some controversial questions in today's English education at Japanese universities. Some issues will soon be improved in our newly-established university. In the second chapter, the English curriculum of Keio University Shonan Fujisawa Campus is

| ネイティブの非常勤の割合 | 0～10% | 11～20% | 21～50% | 51%以上 |
|---|---|---|---|---|
| 国立大学 | 1校 | 4校 | 5校 | 3校 |
| 公立大学 | − | − | 1校 | 1校 |
| 私立大学 | 1校 | 1校 | 5校 | 3校 |
| 計 | 2校 | 5校 | 11校 | 7校 |

非常勤講師のうち、ネイティブスピーカーの占める割合は多い。本学の場合も、平成13年度には4名の非常勤講師のうち2名がネイティブスピーカーで、その割合は全体の50.0%、平成14年度には8名の非常勤講師のうち3名がネイティブスピーカーで、全体の37.5%にあたっている。

### 6．卒業に必要な英語の単位数

学科・学部により異なり、複雑なので回答できないという返答もあったが、その中でも有効な回答と思われるもの19校についてまとめてみた。

| 単位数 | 4単位 | 6単位 | 8単位 | 12単位 | 14単位 | 24単位 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 国立大学 | 3校 | 4校 | 2校 | − | − | − |
| 公立大学 | − | − | 1校 | − | − | − |
| 私立大学 | 3校 | 1校 | 1校 | 2校 | 1校 | 1校 |
| 計 | 6校 | 5校 | 4校 | 2校 | 1校 | 1校 |

単位数が10単位を超えているところは、外国語学部などを持つ大学なので、一様に比較することはできないが、本学の必修4単位というのは最も少ないところに属する。

### 7．非常勤講師（日本人／ネイティブ）への依存率

開設コマ数と非常勤講師数から非常勤依存率を割り出してみると、国公立、私立を問わず、少ないところで20%強、多いところでは70%近くのところもあったが、平均して半数程度を非常勤に頼っている現状が浮かび上がってきた。

### 8．ネイティブ非常勤講師への依存率

開設コマ数の10%程度から、多いところでは80%近いコマが、ネイティブの非常勤講師によって担当されている。実用的な英語に重きが置かれていることは分かるが、中には「従来のしっかりした英語教育は軽んぜられ、英会話学校に成り下がってゆくのではないか」と懸念する声もあった。本当に英語の力をつけるために、ネイティブが教えればそれで良いというのではなく、どの部分をネイティブに受け持ってもらうかといった判断が必要である。

### 9．一クラスの学生数

これは授業の形態や内容により異なる。中には英語Ⅰにおいて受講者が100名を越えるクラスもあったが、リーディングやLLなど、英語の受容能力を高めるクラスにおいては40～60名、英会話や英作文など発信能力を高める授業では20～30名というのが普通のようである。

### 10．授業時間について

大学では週1回90分の授業が一般的であるが、それだけでは外国語能力を高めるに不十分、という声も多い。これについて尋ねたところ、国公立大学においては全てこの枠組で行われているようだが、私立大学では週2コマ、3コマ、4コマと工夫しているところが約半数見受けられた。こうした問題には、私大の方が柔軟に対応しているようである。

introduced. The third chapter explores the correlation between the growth of TOEIC scores and such factors as participation in the Summer English Program in New Zealand, frequent use of an open multi-media language lab, and taking extra-curricular TOEIC classes provided by an outside company.

### 11．授業の内容統一について

同じ科目を履修しても、担当の教員によって内容やレベル、進め方、評価の仕方などに差が出ることはしばしば学生から聞かれる不満の一つである。また、さらに上級のクラスを履修する際に、初級クラスでどの段階まで教えておくべきかなどを押さえておく必要もある。授業の内容統一の方法について、アンケートの設問には次の選択肢を用意しておいた。

ア）すべて教員個人の裁量に任せている
イ）大まかな内容だけを設定し、使用テキスト等は教員に任せている
ウ）同じ教科書を使用しているが、評価は教員に任せている
エ）同じ教科書を使用し、評価も統一した方法で行なっている
オ）その他　（複数回答可）

| | ア） | イ） | ウ） | エ） | オ） |
|---|---|---|---|---|---|
| 国立大学 | 11校 | 8校 | 1校 | 1校 | 2校 |
| 公立大学 | 1校 | − | − | − | − |
| 私立大学 | 3校 | 4校 | 1校 | 1校 | 2校 |
| 計 | 15校 | 12校 | 2校 | 2校 | 4校 |

ほとんどの大学で、使用するテキストや評価が教員個人に任されている。ただし、回答の中には一部必修の科目で、テキストや評価の仕方を統一しているという大学もあった。

### 12．能力別クラス編成

能力別クラス編成は、国公立のほとんどの大学において行なわれていない。ただし、一部の科目について、ヒアリングを中級と上級に分けているところが1校、上級クラスのみ前期の試験結果によって分けているところが1校、そしてクラスは学生が自主的にレベルを選ぶが、工業高校等の推薦枠で入学した学生（英語の時間数が少なく、レベルが劣っていると考えられる）については、特別枠の授業を行なっているというところが1校あった。一方、私立大学においては、10校中8校で能力別クラス編成が行なわれている。クラス分けについては、入学式の後や、ガイダンス時、授業開始前などにプレースメント・テストを実施している。

### 13．検定試験による単位認定

検定試験による単位認定は8校が行なっている。英検に関しては準1級から単位認定している大学が6校、2級からが1校、3級からが1校であった。TOEFLの単位認定は480点からが1校、500点からが2校、520点からが2校で、認定をしているのは英検だけでTOEFLやTOEICは認定していないという大学が3校あった。TOEICについては500点以上で単位認定している大学が1校、600点以上が1校、615点以上が1校、650点以上が2校であった。単位認定の単位数（2単位〜6単位）については各大学により異なる。

### 14．検定試験対策講座

検定試験の対策講座については、国公立大学では1校が設けているだけだが、私立大学では10校中8校が対策講座を開講していた。そのうち、正規の授業科目として設けているところが5校、カリキュラムとは別に時間を設けているところが3校であった。

### 15．対策講座の担当教員

講座の担当教員については、専任教員が担当しているところも多いが、年度によって異なるところもあれば、業者に外注しているところも1校あった。本学においては平成13年度より正規の授業とは別に、業者に依頼してTOEIC対策講座を設けている。

### 16．LL 教室

アンケート調査で、１大学を除いてはみな収容人員 45 ～ 65 名程度のLL 教室（CALL 等）を備えていることが分かった。LL 教室の室数については、25 大学中、１室が 10 校、２室が５校、３室、４室、６室、８室、９室がそれぞれ１校ずつ、15 室以上と答えた大学（LL 教室にパソコンルームやマルチルームを含めて）が２校、LL 教室ではなくCALL 教室が３室あるという大学が１校、パソコンルームを代用しているという大学が１校あった。日本の大学にはLL 教室が完備されていて、（最近はCALL 教室）、室数も多いのにはさすがにハイテクの国と驚かされた。

### 17．使用可能な教材・機器

使用可能な教材・機器は、全てのところで、カセットテープとビデオのほか、半数近いところで、インターネットなども利用できるようになっていることが分かった。

| | カセット | CD | ビデオ | DVD | LD | フロッピーD | CD-ROM | インターネット |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 国立大学 | 13 | 10 | 13 | 7 | 7 | 5 | 5 | 4 |
| 公立大学 | 2 | 2 | 2 | 2 | 1 | 2 | 1 | 2 |
| 私立大学 | 9 | 6 | 9 | 4 | 6 | 4 | 4 | 4 |
| 計 | 24 | 18 | 24 | 13 | 14 | 11 | 10 | 10 |

### 18．自習に利用できるか

せっかくのLL 教室の設備であるが、授業以外には使っていないという大学も多く、自習に利用できると回答した大学は７校だけであった。そのうち１日中開放、授業時間以外は全て開放、自習スペースを設けてそこだけ開放など、その運用の仕方は様々であった。

本学においては、平成 14 年４月から授業で使わない水曜日と木曜日の週２日間、朝９時から夕方５時半まで学生に開放している。因みに、４月 24 日から７月 31 日までの延べ利用者数は 432 人、１日平均 15.4 人であった。１日の最高利用者数は 43 人であった。

### 19．LL 教室の管理について

LL 教室を開放したいが、助手がいないためにできないという回答もあった。それでは、LL 教室の管理は誰がしているのか、質問してみた。（複数回答含む）

| | 専任教員 | 専任助手 | 非常勤助手 | 専任職員 | 非常勤職員 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 国立大学 | ７校 | － | － | ５校 | ３校 | ２校* |
| 公立大学 | － | １校 | － | １校 | － | － |
| 私立大学 | ３校 | ２校 | － | ４校 | － | － |
| 計 | 10 校 | ３校 | ０校 | 10 校 | ３校 | ２校 |

*は、技官１、アルバイト学生１

### 20．自習用教材の有無

LL 教室の備え付け教材については、映画などのビデオのほか、資格検定試験用の対策ソフトなどが多かった。

### 21．海外研修制度について

最後に海外研修制度について尋ねた。海外研修制度については、国立大学では７割程度が、公立･私立大学では全ての大学で設けていることが分かった。期間は２週間から１ヶ月程度で、単位としては２単位あるいは４単位というところが多い。一方の国立大学では、短期の海外研修

制度とは別に、提携大学と１年程度の交換留学制度を設けて、相手校で取得した単位まで認定している。また、海外研修の学生募集業務や相手校との交渉について、国際交流委員会などの窓口を設けている大学もあれば、教務室の一部職員が担当しているところ、英語の教員が交代で関わっているところなどがあった。（また、民間の業者に委託しているところも僅かながらあった。）総じて、これらの三者が協力して行なっているようである。

### 22．その他

最後に自由に意見を記入してもらったところ、学生のニーズに応えるだけではなく、大学における英語教育の教育目標をきちんと定めること、それぞれの大学の事情に合ったカリキュラムを整えることが必須であることなどの意見が寄せられた。

## 第Ⅱ章　他大学訪問：慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの事例

新しい形の英語教育を行っているという慶応大学湘南藤沢キャンパスを見学し、その実情について話を聞いた。英語についてはインテンシブ・コースとモジュラー・コースの２コース制を取っていたが、2001年度より新カリキュラムになり、インテンシブ・コースを廃止して、モジュラー・コースに一本化していた。モジュラー・コースとは、学生一人一人が自分のレベルと興味に合わせて科目を自由に選択する仕組みである。モジュラー・コースは、主に１年生の「スキル・モジュラー」と、２年生以降の「コンテンツ・モジュラー」とに分けられる。

「スキル・モジュラー」では、Basic Grammar Skills（高校英語の復習）、Reading Skills（多彩なジャンルの文書読解、精読、速読）、Oral Skills（ディスカッション、ディベート、演劇）、Academic Writing Skills（学術論文などフォーマルな英文文書の作成）、Creative Writing Skills（脚本、小説、詩などの創作）、Translation Skills（翻訳製作）、Test Preparation Skills（TOEFL、TOEIC、英検、GRE、GMATなど）、Presentation Skills（最新技術を駆使したプレゼンテーション）、Integrated Skills（全スキル統合型。週２コマ）、Project Skills（映像製作、インターンシップ、遠隔地授業など）の10カテゴリーに、118コマの授業が用意されている。１年生はここから半期４コマ×２の８単位を履修する。

２年生以降は、「スキル・モジュラー」と、「コンテンツ・モジュラー」を合わせて、４単位を選択履修する。「コンテンツ・モジュラー」とは、従来の英語の授業とは異なり、専門の授業を英語で行なうもので、学生は当該授業を専門科目の単位として換算することもできれば、コンテンツ・モジュラーの英語の単位として換算することもできる。

それぞれのクラスはTOEFLのスコアに応じて、履修の目安が設定されており、学生は入学すると、外国語のオリエンテーションに当たる授業の中でTOEFLの団体受験用試験を受け、その点数によって受講できる科目が決まってくる。コンテンツ・モジュラーを履修するためには、TOEFLで450点以上、TOEICで650点以上、または英検準１級以上のいずれかを取得しているか、または英語担当教員の承認を得ることが必要である。

このコンテンツ・モジュラー方式で特徴的なのは、英語の教員だけではなく、学部の教員全体が自分の授業を英語で行なうなど協力している点である。さらに、学生が積極的に英語に関わる必要から、授業のほかに、英語研究室の仕事を手伝わせ、多くのネイティブスピーカーと話をしたり、英文の文書を作成する等の機会を与えている。

紙面の関係で詳しい紹介はできないが、従来の外国語科目の枠を越えた様々な試みに驚かされた。ただし、この方法は充分なスタッフとそれ相当の大学規模があってこそ実現できるもので、どの大学においても同じ方法が取れる訳ではない。ただ、各々の大学が自分の大学に合った方法で、参考にできるところを取り入れていくことは可能である。

## 第Ⅲ章　本学におけるTOEIC受験の結果

平成13年度文化政策学部長特別研究「学部における新しい英語教育の研究」の一環として、平成13年7月21日と12月8日に、TOEIC特別団体受験（Institutional Program、以下IP）を静岡文化芸術大学内において行った。今回の受験は開学したばかりの本学においては初めての試みであり、かつ研究のデータを得る目的があったので、研究費から経費を賄い、学生には無料で受験させた。第2回目のテスト時にとったアンケートによると、受験者89名のうち80名が次年度有料になってもTOEICの特別団体受験制度を利用したいと答えている。（このIP受験スコアは公開受験スコアと同一のものとして扱われる。）

### 1．TOEICについて

TOEIC（トーイック）とは、“Test of English for International Communication”の略称で、英語によるコミュニケーション能力を幅広く評価する世界基準のテストのことである。受験者の能力を10点～990点のスコアで評価するが、そのスケールは常に一定に保たれている。2000年度の統計によれば、世界約50ヶ国で実施され、日本での受験者数は年間100万人を超えている。

TOEICは、2時間で200問に答えるテストで、リスニング（100問）とリーディング（100問）の2つのセクションから構成されている。出題形式の説明もテスト問題もすべて英文で、解答はマークシート方式である。リスニングは45分間のテストで、テープに吹き込まれた会話やナレーションなどを聞いて設問に答えるものである。リーディングは75分間のテストで、実際の生活で使われているような英文（記事や広告文など）を読んで設問に答えるものである。

TOEIC運営委員会が行った758社の企業に対するアンケートでは、60.7%の企業が社員採用時にTOEICスコアを考慮していると答えており、将来的に考慮することを考えている企業を含めると、その割合は81.9%に上る。また企業が新入社員に期待するスコアは、運営委員会の調査では、400点から500点の間のスコアと答えた企業が64.3%で、そのうち500点と答えた企業が最も多く28.9%となっている。また海外部門の社員に関しては、700点が期待されるスコアであるとする回答が最も多くなっている（19%）。

運営委員会の発行した1999年度の受験者数と平均スコアの資料によると、IP受験の場合、大学生の平均点は450点（Listening 245点＋Reading 205点）である。これは公開テストの平均点である568点（Listening 310点＋Reading 258点）と比較すると、随分低いように感じられる。それは、IP受験が学校で強制的に受けさせられている場合が多いのに対して、公開受験ではむしろ意識が高く、英語に自信がある者が多く受験しているからである。なお、学年別ではIP受験の全国平均スコアは、次のように発表されている。

| | Total | Listening | Reading |
|---|---|---|---|
| 大学1年生 | 345 | 196 | 149 |
| 大学2年生 | 422 | 234 | 188 |
| 大学3年生 | 477 | 259 | 218 |
| 大学4年生 | 498 | 265 | 233 |

### 2．本学におけるIP受験の結果

第1回目の受験者数は96名、第2回目の受験者数は89名であった。（以後、2回とも受験した89名の結果のみを扱うことにする。）

89名のうち、学科別の人数の内訳は次の通りである。

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 年生 | 国際文化学科 | 17 名 | 文化政策学科 | 0 名 | 芸術文化学科 | 1 名 |
| | 生産造形学科 | 0 名 | 技術造形学科 | 2 名 | 空間造形学科 | 1 名 |
| 2 年生 | 国際文化学科 | 53 名 | 文化政策学科 | 8 名 | 芸術文化学科 | 1 名 |
| | 生産造形学科 | 4 名 | 技術造形学科 | 0 名 | 空間造形学科 | 2 名 |

第 1 回目と第 2 回目を通じて、最高得点の760点（Listening 395点＋Reading 365点）を取得したのが、デザイン学部 1 年生の第 1 回目の結果であったことは特筆に価するであろう。なお、当該学生の第 2 回目の得点は 715 点（Listening 380 点＋ Reading 335 点）で、第 2 回目のIP受験者の中では 2 位であった。第 2 回目のトップは国際文化学科の 2 年生で735 点（Listening 425 点＋ Reading 310 点）であった。また、就職活動において、 1 つの目安になる 500 点以上を取得した学生は第 1 回目が 12 名（700 点以上は 1 名）、第 2 回目は 20 名（700 点以上は 3 名）であった。TOEIC の結果は 2 年間有効なので、今回の IP 受験に参加した（当時）2 年生は、その得点を 4 年次の就職活動で用いることができる。続いて、上記の 89 名を各種の条件で分類した集計結果を記すことにする。

### （1）第 1 回目と第 2 回目のスコアの平均点

| | Total | Listening | Reading |
|---|---|---|---|
| 第 1 回 | 401.1 | 227.7 | 173.4 |
| 第 2 回 | 443.1 | 250.1 | 193.0 |
| 点数の伸び | 42.0 | 22.4 | 19.6 |

### （2）1 年生と 2 年生の点数差はどのくらいか

| | 1 年生：21 名の平均点 | | | 2 年生：68 名の平均点 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | Total | Listening | Reading | Total | Listening | Reading |
| 第 1 回 | 421.0 | 228.1 | 192.9 | 394.9 | 227.6 | 167.4 |
| 第 2 回 | 430.2 | 241.9 | 188.3 | 447.1 | 252.6 | 194.4 |
| 点数の伸び | 9.2 | 13.8 | △4.6 | 52.2 | 25.0 | 27.0 |

### （3）文化政策学部とデザイン学部ではどうか

| | 文化政策学部：80 名の平均点 | | | デザイン学部： 9 名の平均点 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | Total | Listening | Reading | Total | Listening | Reading |
| 第 1 回 | 399.0 | 227.1 | 171.9 | 419.4 | 233.3 | 186.1 |
| 第 2 回 | 446.6 | 254.4 | 192.2 | 411.7 | 211.7 | 200.0 |
| 点数の伸び | 47.6 | 27.3 | 20.3 | △7.7 | △21.6 | 13.9 |

### （4）国際文化学科とその他の学科との違いはどのくらいか

| | 国際文化学科：70 名の平均点 | | | その他の学科：19 名の平均点 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | Total | Listening | Reading | Total | Listening | Reading |
| 第 1 回 | 406.0 | 229.3 | 176.7 | 382.9 | 221.8 | 161.1 |
| 第 2 回 | 453.5 | 258.4 | 195.1 | 404.7 | 219.5 | 185.3 |
| 点数の伸び | 47.5 | 29.1 | 18.4 | 21.8 | △2.3 | 24.2 |

### (5) 国際文化学科の１年生と２年生ではどうか

| | 1 年生：17 名の平均点 | | | 2 年生：53 名の平均点 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | Total | Listening | Reading | Total | Listening | Reading |
| 第 1 回 | 395.3 | 218.5 | 176.8 | 409.4 | 232.7 | 176.7 |
| 第 2 回 | 412.9 | 236.2 | 176.8 | 466.5 | 265.6 | 200.9 |
| 点数の伸び | 17.6 | 17.7 | 0 | 57.1 | 32.9 | 24.2 |

## 3. 英語の課外学習と TOEIC スコアとの相関関係について

ニュージーランドのUNITEC工科大学における夏期英語研修（主に２年生対象）、TOEICのIP受験、マルチメディアLL教室開放日における英語教材の自習（特別研究の一環として平成13年11月9、16、30日、12月７日の４回、午前10時40分〜午後４時20分に実施された）、および平成13年度後期に本学で開講された外部機関によるTOEIC講座（470点目標クラス）に参加した学生たちのデータを集計する。（なおTOEIC講座は第２回IPテストの時には、まだ開講期間中であった。）

### (1) ニュージーランドの UNITEC 工科大学夏期英語研修

| | 参加者：29 名の平均点 | | | 不参加者：60 名の平均点 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | Total | Listening | Reading | Total | Listening | Reading |
| 第 1 回 | 401.2 | 235.7 | 165.5 | 401.0 | 223.8 | 177.2 |
| 第 2 回 | 482.6 | 269.1 | 213.4 | 424.0 | 240.9 | 183.1 |
| 点数の伸び | 81.4 | 33.4 | 47.9 | 23.0 | 17.1 | 5.9 |

興味深いことに、リスニングの得点以上にリーディングの得点が大きく伸びている。TOEICのリーディング・セクションは、広告、手紙など生活に密着した文書が題材になっているため、５週間外国で生活したことが得点アップの大きな要因になったと思われる。

### (2) マルチメディア LL 教室開放日の利用

| | 利用した：33 名の平均点 | | | 利用しなかった：56 名の平均点 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | Total | Listening | Reading | Total | Listening | Reading |
| 第 1 回 | 417.4 | 238.6 | 178.8 | 391.4 | 221.3 | 170.2 |
| 第 2 回 | 473.0 | 269.2 | 203.8 | 425.4 | 238.8 | 186.6 |
| 点数の伸び | 55.6 | 30.6 | 25.0 | 34.0 | 17.5 | 16.4 |

2 回以上利用した学生：14 名の平均点

| | Total | Listening | Reading |
|---|---|---|---|
| 第 1 回 | 456.4 | 256.1 | 200.4 |
| 第 2 回 | 519.6 | 287.9 | 231.8 |
| 点数の伸び | 63.2 | 31.8 | 31.4 |

当教室にインストールしてあるパソコン・ソフトは、『TOEIC TEST パーフェクト対策　（スコア 600 点用）』（創育）と、『BBC ニュー・イングリッシュ・コース』（アルプス・システム・インテグレーション株式会社）である。前者はテスト問題を解く形式、後者は総合的に英語のコミュニケーション能力を伸ばす目的のものである。

### （3）TOEIC 講座

| | 受講した：46 名の平均点 | | | 受講しなかった：43 名の平均点 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | Total | Listening | Reading | Total | Listening | Reading |
| 第 1 回 | 388.0 | 223.0 | 162.8 | 415.0 | 232.7 | 182.3 |
| 第 2 回 | 441.1 | 247.9 | 193.2 | 445.2 | 252.4 | 192.7 |
| 点数の伸び | 53.1 | 24.9 | 30.4 | 30.2 | 19.7 | 10.4 |

TOEIC 講座に参加した学生の平均点そのものが低めであるのは、今回試験的に導入された TOEIC 講座が 470 点を目標とする講座だったことが影響していると思われる。

### （4）得点の伸びの比較

| | Total | Listening | Reading |
|---|---|---|---|
| 全体の伸び | 42.0 | 22.4 | 19.6 |
| 2 年生の伸び | 52.2 | 25.0 | 27.0 |
| 1 年生の伸び | 9.2 | 13.8 | △4.6 |
| UNITEC 夏期英語研修参加者の伸び | 81.4 | 33.4 | 47.9 |
| 二回以上 LL 教室開放日を利用した者 | 63.2 | 31.8 | 31.4 |
| TOEIC 講座 受講生の伸び | 53.1 | 24.9 | 30.4 |

各課外学習に重複して参加している学生も多く、また TOEIC 講座に関しては最終的に講座が終わった段階のデータではないので単純に比較することはできないが、UNITEC 参加者の点数がずば抜けて伸びているのはよく分かる。

### （5）全てに参加した学生、8 名の平均点

| | Total | Listening | Reading |
|---|---|---|---|
| 第 1 回 | 408.1 | 243.1 | 165.0 |
| 第 2 回 | 490.6 | 271.3 | 219.4 |
| 点数の伸び | 82.5 | 28.2 | 54.4 |

以下の（6）～（8）には、（5）「全てに参加した学生」のデータは含まれない。

### （6）UNITEC に参加して、LL 教室も利用した 3 名の平均点

| | Total | Listening | Reading |
|---|---|---|---|
| 第 1 回 | 468.3 | 271.7 | 196.7 |
| 第 2 回 | 578.3 | 320.0 | 258.3 |
| 点数の伸び | 110.0 | 48.3 | 61.6 |

### （7）UNITEC 夏期研修と TOEIC 講座の両方に参加した 12 名の平均点

| | Total | Listening | Reading |
|---|---|---|---|
| 第 1 回 | 371.3 | 213.3 | 157.9 |
| 第 2 回 | 445.8 | 245.8 | 200.0 |
| 点数の伸び | 74.5 | 32.5 | 42.1 |

（8）LL教室を利用し、TOEIC講座も受講した12名の平均点

| | Total | Listening | Reading |
|---|---|---|---|
| 第１回 | 405.0 | 229.2 | 175.8 |
| 第２回 | 442.9 | 254.6 | 188.3 |
| 点数の伸び | 37.9 | 25.4 | 12.5 |

（9）行事のどれにも参加しなかった学生、23名の平均点とその伸び

| | Total | Listening | Reading |
|---|---|---|---|
| 第１回 | 406.5 | 224.1 | 182.4 |
| 第２回 | 410.7 | 229.3 | 181.3 |
| 点数の伸び | 4.2 | 5.2 | △1.1 |

## おわりに

以上の結果を一言でまとめるならば、英語は勉強すれば伸びるし、勉強しなければ一向に伸びないということであろう。５週間に渡る英語集中講座への短期留学は確かに英語力を数段アップさせた。その後の英語学習に強固な動機づけをも与えたであろう。これらの数字から言えることは、大学サイドとしては、学生に英語学習の様々な機会や環境を提供し続けることである。

また、アンケートと大学訪問を通して、日本の大学の英語教育が今、大幅に見直されてきていることを、実感することができた。ただし、オーラル・コミュニケーションが重視されているからといって、単に会話の授業を設ければいいというのではなく、各学生に英語の力をつけさせるために一体何が必要なのかを、大学の置かれている状況に合わせて考えていかなければならないであろう。

本学でも、開学から４年が過ぎると、新カリキュラムが採用されることになる。その中で、少しでもより良い英語教育を目指して、日夜取り組んでいきたいものである。

〔本研究は、「静岡文化芸術大学平成13年度文化政策学部長特別研究費」の助成を受けて行われたものである。〕